

論文内容要旨

論文題目

中国語母語話者の日本語習得における母語の影響

—「の」の過剰使用と過少使用—

所属部門： 臨床的機能再生 部門

所属講座： 高次脳機能障害学 講座

氏名： 秦 明星

【内容要旨】(1,200字以内)

本研究の目的は、中国語母語話者が日本語を習得する際に、母語の文法構造や日本語の学習開始年齢がどのように影響するかを知ることにある。

本研究では日本語の名詞修飾を習得する過程に見られる「の」の過剰使用（「の」を使用すべきではない箇所を使用する現象。「買ったの車」「面白いの映画」「静かの所」など）と過少使用（「の」を使用すべき箇所で使用しない現象。「英語先生」「金指輪」など）を取り上げ、即時訳出法を用いて3つの調査を行った。中国語には助詞「の」に相当する「的」があり、名詞を修飾する場合には原則として修飾部と名詞の間に「的」が必要である（「的あり」と名づける）。しかし、形容詞および名詞が名詞を修飾する場合に、修飾部と名詞の間に「的」が入らないことがある（「的なし」と名づける）。

対象は日本の学校に通っている中国語を母語とする未成年者とその親（国際結婚の日本人配偶者）である。調査1は動詞・イ形容詞・ナ形容詞を修飾語とする場合の「の」の過剰使用について、未成年者11名で検討した。修飾語の品詞に関わらず「の」の過剰使用は多く観察され、イ形容詞の誤用が一番多かった。

調査2はイ形容詞を修飾語とする場合の「の」の過剰使用について、未成年者17名と成人17名（うち親子12組を含む）を対象として検討した。中国語で「的あり」形容詞の場

合は「的なし」形容詞の場合より「の」の過剰使用数が有意に多かった。また、未成年者は成人より誤用が有意に少なく、親子の成績に関連は認められなかった。

調査3は修飾語が名詞の場合に見られる「の」の過少使用について、未成年者11名とその親11名を対象として検討した。「的なし」の場合は「的あり」の場合より「の」の過少使用数が有意に多かった。また、子供は親より誤用が有意に少なく、親子間で成績に関連は認められなかった。

本研究は「の」の過剰使用と過少使用について、未成年者を対象とした初めての研究である。「の」の過剰使用と過少使用は、中国語の文法構造（「的」の使用）による影響である可能性が大きいと考えられた。また、学習者の来日時年齢が低く、在日月数が長いほど「の」の誤用が少なかったことから学習開始年齢と学習期間は日本語習得に関与することが示唆された。ただし、本研究では未成年者において来日時年齢と在日月数との間に逆相関が見られたため、両者の影響を分離できなかった。

本研究はまた「の」の過剰使用と過少使用について、はじめて親子間の成績の関連を検討した。その結果、親子間の成績に相関はなく、「の」の過剰使用と過少使用に関しては、親の能力は子供の習得に影響しないと考えられた。子供の成績は親より良好で、子供における教室学習の効果が示唆された。




平成 20 年 / 月 / 15 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 秦 明星

論文題目： 第二言語における母語の影響

審査委員：主審査委員 鈴木 匡子 
副審査委員 鈴木 浩 
副審査委員 加藤 丈夫 

審査終了日：平成 20 年 / 月 / 11 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

全体としては博士論文として認められる内容であると考えますが、下記の点につき修正を必要とする。

1. 論文名をより内容に即した具体的なものに変更する。
例えば、中国語母語話者の日本語習得における母語の影響 — 「の」の過剰使用と過少使用—
2. 新知見は何か、より明らかになるように要約、結果、考察などを書き改める。
3. 被験者の教育歴を表に追加する。
4. 被験者が来日前には日本語を学習していなかったことを記載する。
5. 来日時年齢が低い人は、在日期间が長い傾向があるようにみえる。両者に何らかの関連がないかどうかを統計学的に検討し、グラフを作成する。もし2つの要因を分離できない場合は、本研究の限界として考察に記載する。
6. 以下の誤りを正す；
何ヶ月→何ヵ月
スウェーデン語→スウェーデン語
表3の年齢の項
調査3の結果スライドの p 値

(1, 200字以内)